

を握り合った。翌日初めて道後温泉へ。そして松山の人となり、今日に至っている。

満州からシベリアの八年

愛媛県 宇都宮 政 壽

昭和初期から七十余年が経過した。耐えることを美德としてきたが、朝鮮での生活、延吉での生活、入ッしてからのさまざまな生活、筆舌には尽くしがたい。

これは私一人ではない。南の島、中国大陸、また北の大地シベリアで、戦場化した沖繩で、広島、長崎の二発の原子爆弾で、父が、夫が、兄弟が祖国日本のことを案じながら散っていった、その犠牲者の冥福を祈りたい。戦後五十三年余り、立派に立ち直ったのもこの人たちのおかげだ。

世相も目まぐるしく変化してゆく。若者にも言いにくい。一見平和とも思うが、世界の隅々には爆弾テロなどが起き、物騒な世の中である。

「忘れまいこの体験を」。そして子や孫を通じて後世に伝えたい。

大正九年十月八日、東宇和郡笠置村（合併して石城村、現宇和町）の農家に長男として生まれる。

県立宇和農業学校（現宇和高校）在学中に肋膜炎と腹膜炎に罹病、療養生活二年半、全快後、石城村役場に一年間勤める。昭和十五年七月徴兵検査を受け、丙種に合格。

十六年九月、私立中野高等無線電信学校を繰り上げ卒業。十月一日付で満州国治安部警務司に採用され、新京の警察学校に入る。同月二十四日、通化省公署警務庁無電室勤務を命じられ着任。以後、濛江県、輯安県公署警務科無電室で無線通信士兼暗号員として勤務。十九年七月依願退職。

八月一日付で北安省北安市、北満車両株式会社に入社。同社に勤務中の二十年五月十六日、召集令状を受

領。翌十七日午後一時、松風一五二〇七部隊北孫呉六二八部隊に入隊した。

六月末、人事係の准尉が「予備士官学校を受験せよ」と。今さら学校でもない、固辞したところ、七月一日付で斬込挺進隊に転属を命じられた。この隊は昼夜転倒演習を実施中で、昼と夜とが逆、兵は木箱に砂を詰め、疑似爆薬を抱え、兵が引つ張って走り回る大八車を敵戦車に見たてて飛び込む演習ばかり。生きては絶対に帰れないと覚悟をした。

七月末に身体検査があり、軍医に「結核性の肋膜炎と腹膜炎で三年近く入院した」と申告したのが効を奏してか、原隊に帰される。

ホッとしたのも束の間、翌二日には、新京に新設部隊の要員として転属命令が出る。五日、満州三七三二部隊諏訪隊に着任。この時携行した三八式騎兵銃や帯剣などを「歩兵部隊に回せ」と取り上げられて丸腰になる。

十五日早朝、「ソ軍迎撃に第一線に進出する」と手榴弾二発が支給された。これで戦えと言うのか、天下

に聞こえた関東軍も落ちぶれたものである。寛城子で終戦を迎え、武装解除後、新京医科大学舎に収容される。収容直後、ソ連兵に囲まれ、銃を突き付けられて時計や万年筆を強奪された。

九月十一日新京出発。この時の編成で指揮班に編入され、将校の荷物運びと炊事係。二十八日、黒河からブラゴエに上陸。ここの夜営の時、工兵隊から借りていた荷物運び用の鉄棒に夕食の飯盒を吊るして火にかけ、井上二等兵に火の番をさせて私は全員の水筒を持って河まで水を汲みに行き、帰營してビックリ。鉄棒が爆発して、井上の胸に鉄片が突き刺さっており、飯盒は形もない程に。将校達は頭から灰や汁を浴びて呆然としていた。私は当然にソ軍本部に連行され取り調べを受ける。「黒河の棧橋近くの路上で拾った」で押し通して釈放されたが、一つ間違えば銃殺もの、冷汗タラタラであった。

工兵隊に問い合わせたところ「戦車の無限軌道に喰い込ませて爆破、走行不能にする兵器だ」という。知らぬことはいえ、大勢の犠牲者を出しかねないとこ

ろであった。病院に送った井上二等兵の生死は不明のまままで出発せざるを得ず、誠に無念であった。

十月四日ウランウデの收容所に入り、製材工場班に編入。非能率な工場で、監督はがなるばかりで成果はさっぱり、ノルマ未達が続き、食事は質量とも最悪になる。一年くらいは我慢をしたが限界にきて、重営倉覚悟でスト決行。カンカンに怒る監督に「一片のパンと少量の塩汁」を見せ、「これが昼食、これで働けるか、ノルマの査定を考えろ」と交渉、監督もこの食事には驚いて善処を約束したのでスト中止、怪我人なしで終わった。

一年半が過ぎた頃、原木入庫で貨車おろしの夜間作業中、ソ軍軍曹が迎えに来た。何事かと帰ったところ、本部の地下室に放り込まれ、若い中尉から「暗号」について尋問を受けた。脅したり、時には拳銃で殴られましたが、何度も死にそこなった身、糞度胸を決めて「忘れた」「知らん」以外は黙秘で通したら、匙を投げてか、十時間程で解放された。噂ではあるが、「憲兵、特高警察官らを三人密告すれば日本に帰

す」の甘言につられて密告する者がいるらしかった。

丁度その頃、アクチーブと称する連中がやって来て、收容所の民主化をやるという。私たち少数の二等兵は、收容所に入ってからも関東軍の編成で、階級もそのままの不合理に屈辱と苦痛と忍耐を強いられていたので、彼等に協力して階級呼称を撤廃しようと思かたに根回しをしていたある夜、全身に刺青をしている青木上等兵に裏庭に呼び出され「階級呼称撤廃の首謀者が貴様ということで、班長達が私刑にかけると息巻いている。俺が抑えているが、長くは抑えきれん。弱っている身体にやられたら死ぬぞ。自分のことだけ考えろ」と注意してくれた。これもまた密告によるものようであった。

アクチーブの連中は、收容所の民主化どころか、「スターリン大元帥に感謝しよう」「ノルマを二〇〇%達成しよう」「天皇島に敵前上陸の理論武装をしよう」など、ソ連迎合の話ばかり。「收容所の民主化はどうした」などとヤジっていたら「收容所の民主化を阻む反動分子」のレットテルを貼られ、二十二年九月三十日

ユウレユラク收容所に転属。ここでは屠殺工場、漬物工場、道路工事、鉄道工事、農場など日替わりの労働をしながら、各地からの転属兵を待って十月二十五日、キンロスカ五二五―一收容所（クスバス炭鉱地帯）に転属。

この收容所に入った直後、階級呼称が撤廃され、私は何がどう間違ったか班長に指名された。班員二十人中十七人までが上等兵以上の兵、彼等が何かにつけて陰湿な苛めをやるので、肉体的疲労に精神的疲労が加わり苦しい日々が続いた。

坑内の労働は、石炭の貨車への積み込みや原木の運搬が主な作業。八時間労働、三交代制、一カ月毎に作業時間交代。交代する日は十六時間坑内で休みなしの労働である。中で最も厳しい交代は午後四時入坑の時。午後三時ごろ收容所を出発するので夕食抜き、翌日の午前八時まで飲まず食わずの重労働。坑から上がって器具を返納、シャワーを浴びて整理、十時過ぎに收容所に帰り、朝食後、泥のように眠りこけたものがある。

ある日、終業時間が近づいた頃、監督が回って来て空の貨車を見付け「横坑に溜まっている石炭を落とせ」と怒りまくるので、危険で嫌な作業だが私がやるざるを得ず、横坑に上り、この辺までなら大丈夫だろうとスコップを突きたてると同時に足元が崩れ、大量の石炭に巻き込まれて豎坑に転落し胸まで埋まった。

これは生き埋めになると大声で必死に連呼、異常を感じた監督が上って来て顔を覗かせたので「早く石炭をおろせ」と怒鳴るが、落ちてくる石炭に「早くおろせ、早く」と気が気ではなかった。監督が「大きな石炭が出て来た」と馬鹿笑いをしたのには「冗談じゃない、死ぬ思いをしていたのに、この野郎」とぶっ飛ばして、スカッとしたかった。

二十三年七月七日、帰国のため收容所出発。二十一日ナホトカ着。八月十一日永徳丸に乗船。十四日舞鶴に上陸した。

愛媛県では平成九年一月二十五日に「愛媛シベリアを語る会」の創立総会が、四月十九日には定期総会が開かれ、本県出身のシベリア抑留犠牲者一千余人の慰

霊と恒久平和確立の願いを柱とする会則を決定。六月一日、慰霊碑建立委員会が発足。会員、遺族、一般県民、企業団体の好意によって二千二百万円の浄財が寄せられ、県護国神社の隣接地に建立を進めていた慰霊碑が完成、十二月十八日除幕式が執り行われた。碑は、高さ五メートル、幅二メートル、重さ十トン、平和を支える人の姿をデザイン。中央に「鎮魂シベリア抑留者慰霊之碑」と刻まれている。この日、会員、遺族ら約百五十人が出席、御霊の冥福と恒久の平和を祈念して献花。

式典に参列して、満州からシベリアの八年、幾たびか生死の狭間を運強く生き抜いた遠い記憶を思い起こして感無量であった。

私の人生記

シベリア抑留苦難の思い出

愛媛県 橋 兵馬

愛媛県温泉郡浮穴村に、父橋熊之丞の長男として大正三年一月十四日生まれる。家は代々農業を営んでおり、昔は、農家の長男は農家を後継していかなければいけなかった。そのため、農家の長男は上の学校へ行く必要はないと父に言われ、私は浮穴尋常高等小学校へ行った。小学校六年、高等科二年を卒業し、それからは夜間中学に徴兵検査まで熱心に通った。毎年皆勤で賞状と景品をもらった。

徴兵検査は昭和九年、道後公会堂で行った。昔は青年訓練所へも真面目に通った。そして一通りの軍隊教育は受けていた。私は小学校七ツ行きのため徴兵検査も一年遅れた。そのため教練を受けた時間超過で、徴兵官より表彰を受けた。我々の時代はまだ戦争もなか